

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

## 妻の言葉

「まあ、良いではないか。勘六もいい歳をした男だ。秘密の一つや二つ無い方が不思議ではないか。心配せずとも良い。もう再び家を出ることもあるまい」

周藤家にも日吉村にも平穏な日々が過ぎて行き、過去のさまさまの出来事が、夢の中のことのように思えた。

けれども彌兵衛の胸の内には誰にも言えない新たな不安が芽生え、苦悩の日々を送っていた。それは、意宇川の川普請が、まだ本物では無いという不安だった。

何年に一度という大雨が、過去の歴史の中で繰り返され、その度に、祖父や父は苦しみの中に置かれた。どんなに大雨が降ろうともどんな大水に襲われようとも、その水が岩山にぶつかるとも岩山の切り通しの幅を広げなくてはならない。そうしなければ不安は消えないのだ。雨期を前にして、彌兵衛は、じっとしていられない気持ちだった。

彌兵衛、川幅をもっと広げよ。――

彌兵衛、中途半端なことをしてはならぬぞ。――  
祖父や父の声に揺り起こされて、夜中には、つと目を覚まし、蒲団の中に半時も座り込むことも有った。



画 寺戸良信

しかし、もう売る物も無い周藤家の財政で人を雇うことは出来ない。それ以上に、いくら妻とは言え、クニに、これ以上の苦勞を押し付けることは出来ない。

彌兵衛の苦悩は深まるばかりだった。その年の夏、彌兵衛は長男の勘六に庄屋の役職を譲り、隠居の身となった。

身体の調子が良くないと言うのが、表向きの理由だが、彌兵衛の心の中では、一つの決意が出来つつ有った。

村の誰もが、彌兵衛の身を案じていた。「旦那さまは、村を救うために苦勞をなされたのだから、御内儀さまと少しは樂をなされた方がいい」

事実、この数か月の間に彌兵衛は、人が変わったようにやつれ、目が鋭くなっていた。それは、彌兵衛の気付かぬところで、心の苦悩が表情に表れていたと言える。

彌兵衛は憑かれたように正林寺を訪れ、本堂に座り、目を閉じて、自問自答を繰り返した。そんな彌兵衛を再び奮い立たせたのは、他ならぬ妻、クニの言葉だった。

「旦那さま、どうぞ、御自分の思った通りにお進み下さい。旦那さまは隠し事が出来ないお方で、やりたいことやお考えが、すぐに顔や態度に出してしまいます。自分のやりたいことをなさっているのが、旦那さまのいちばんの幸せでございましょう。いくら私が旦那さまのお体を案じて、心が死んでいる旦那さまを見るのは、もっと辛いことでございます。私のことなら大丈夫でございます」

クニは、彌兵衛の苦悩をすでに見抜いていたのである。